366日の昔話

福娘童話集

マッチうりの しょうじょ

福娘童話集　きょうの世界昔話より

マッチうりのしょうじょ　QRコード

おなまえ

福娘童話集　豆本シリーズ 17

福娘童話集　豆本シリーズ

・ももたろう	・つるのおんがえし	・おやゆびひめ
・かぐやひめ	・赤ずきんちゃん	・みにくいアヒルの子
・カチカチ山	・ジャックと豆の木	・にんぎょひめ
・花咲じいさん	・あわれなあくま	・花のおじいさん
・金太郎	・シンデレラ	・はだかの王さま
・浦島太郎	・しらゆきひめ	・ゾウのはなはなぜながい
・かさじぞう	・マッチ売りの少女	・ヘンゼルとグレーテル
・サルカニがっせん	・メスウシとライオン	・アリババと40人の盗賊
・いっすんぼうし	・ガリバーの冒険	・ウサギとカメ
・したきりスズメ	・眠れる森の美女	・北風と太陽

福娘の携帯向けサイト

・福娘童話集
（世界と日本の昔話）

・366日への旅
（記念日・誕生花・誕生日）

・こどもの病気相談所
（こどもの病気検索・対応など）

・世界60秒めぐり
（世界の国々の豆知識）

ＱＲコード

http://hukumusume.com

むかしむかし、ゆきの ふりしきる 大みそかの ばん。
みすぼらしい ふくを きた、マッチうりの しょうじょが、さむさに ふるえながら、一生けんめい とおる人に よびかけていました。
「マッチは いかが。マッチは いかがですか。だれか、マッチを かってください」
でも、だれも たちどまってくれません。
「おねがい、一本でも いいんです。だれか、マッチを かってください」
きょうは まだ、一本も うれていません。
ばしょを かえようと、しょうじょが あるきはじめたときです。
目のまえを 一だいの ばしゃが はしりぬけました。
あぶない！
しょうじょは あわててよけようとして、ゆきの 上に ころんでしまい、そのはずみに くつを とばしてしまいました。
おかあさんの おふるの くつで、しょうじょの 足には 大きすぎましたが、しょうじょの もっている、たった一つの くつなのです。

1

しょうじょは あちらこちらさがしましたが、どうしても 見つかりません。
しかたなく、はだしのままで あるきだしました。
つめたいゆきの上を いくうちに、しょうじょの 足は ぶどういろに かわっていきました。
しばらくいくと、どこからか にくを やくにおいが してきました。
「ああ、いいにおい。…おなかが すいたなあー」
でも、しょうじょは かえろうと しません。
マッチが 一本も うれないまま いえに かえっても、おとうさんは けっして いえに 入れてくれません。

2

それどころが、
「この、やくたたずめ-!」
と、ひどく ぶたれるのです。
しょうじょは さむさを さけるために、いえと いえとの あいだに はいって しゃがみこみました。
それでも じんじんと こごえそうです。
「そうだわ、マッチを すって あたたまろう」
そういって、一本の マッチを かべに すりつけました。
シュッ。
マッチの 火は、とても あたたかでした。
しょうじょは いつのまにか、いきおいよくもえる ストーブの まえに すわっているような 気がしました。
「なんて あたたかいんだろう。ああ、いい気もち」
しょうじょが ストーブに 手を のばそうとしたとたん、マッチの 火は きえて、ストーブも かきけすように なくなってしまいました。

3

しょうじょはまた、マッチを すってみました。
あたりは、ぱあーっと あかるくなり、ひかりが かべを てらすと、まるで へやの 中に いるような きもちに なりました。
へやの 中の テーブルには、ごちそうが ならんでいます。
ふしぎなことに、ゆげを たてた、がちょうの まるやきが、しょうじょの ほうへ ちかづいてくるのです。
「うわっ、おいしそう」
そのとき、すうっと マッチの 火が きえ、ごちそうも へやも、あっというまに なくなってしまいました。
しょうじょは がっかりして、もういちど マッチを すりました。
すると どうでしょう。
ひかりの 中に、大きな クリスマスツリーが うかびあがっていました。
えだには かぞえきれないくらい、たくさんの ろうそくが かがやいています。
おもわず しょうじょが ちかづくと、ツリーは ふわっと なくなってしまいました。
また、マッチの 火が きえたのです。
けれども、ろうそくの ひかりは きえずに、ゆっくりと、そらたかく のぼっていきました。

4

そしてそれが、つぎつぎに ほしに なったのです。
やがて そのほしの 一つが、ながい ひかりの おをひいて おちてきました。
「あっ、いま、だれかが しんだんだわ」
しょうじょは、しんだおばあさんの ことばを おぼえていました。
「ほしが 一つ おちるとき、一つの たましいが かみさまの ところへ のぼっていくんだよ」
しょうじょは やさしかった おばあさんの ことを おもいだしました。
「ああ、おばあさんに、あいたいなー」
しょうじょは また、マッチを すりました。
ぱあーっと、あたりが あかるくなり、そのひかりの 中で だいすきな おばあさんが ほほえんでいました。

5

「おばあさん、わたしも つれてって。火が きえると いなくなるなんて いやよ。わたし、どこにもいくところが ないの」
しょうじょは そういいながら、のこっている マッチを、一本、また一本と、どんどん もやしつづけました。
おばあさんは、そっと やさしく しょうじょを だきあげてくれました。
「わあー、おばあさんの からだは、とっても あったかい」
やがて、ふたりは ひかりに つつまれて、そらたかく のぼっていきました。
しんねんの あさ、しょうじょは ほほえみながら しんでいました。
あつまった 町の 人びとは、
「かわいそうに、マッチを もやして あたたまろうと していたんだね」
と、いいました。
しょうじょが マッチの 火で おばあさんに あい、てんごくへ のぼったことなど、だれも しりませんでした。

おしまい。

6